

声明の歴史と心

浄土真宗と声明

声明しょうみょうとは、お経や偈文げもん^{*1}を読誦どくじゆする際、節ふしや抑揚よくようをつけてお勤めすることを言います。キリスト教にグレゴリオ聖歌などの讚美歌があるように、仏教でも昔から、節に乗せて仏さまのお徳をほめたたえる「声明」が行われてきました。

日本においては、特に天台宗の声明が大きな影響を与えてきました。浄土真宗本願寺派の声明も、この流れを汲むものです。その昔、本願寺第3代かくによしゅうにん覚如上人は、天台声明の根拠地である京都大原を訪れていますし、江戸時代には天台宗の声明家を次々に招いて研鑽けんざんに努めてきた歴史があります。

さて、私たち真宗門徒にとって最も親しみ深い声明と言え、しょうしんげ「正信偈」でしょう。現在お勤めされている節そうふ（草譜・行譜・真譜ぎょうふ・しんぷ）は、従来の節を昭和8年（1933）に改訂したものです。また、今回の大遠忌に際しては、「宗祖さんごう讚仰作法」というお勤めが新たに制定されました。声明も、時代とともに刻々と変化していることがわかります。

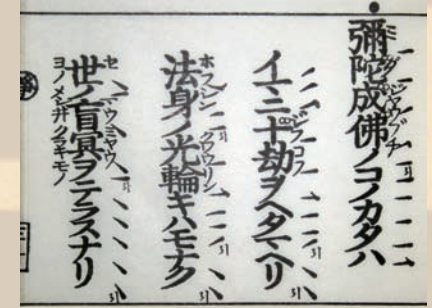
調べを整えてお勤めする

蓮如上人は、正信偈のお勤めの仕方に関して、かなり細かい指示を出しておられたようです。例えば、『本願寺作法之次第』という書には、「法蔵菩薩」の「法蔵」は「ほぞう」と言わずにきちんと「ほうぞう」と言いなさいとか、和讚きみょうで「帰命せよ」を「きみょうせよ」と言うと「失せよ」と聞こえるからよくない、などの指示が残っています。

お勤めは、一人でするのもありがたいですが、御堂みどうで、大勢でなされる勤行は、また格別の趣おもむきがあります。その上、一同の声こゑがきれいに揃うと、感動が倍増するように思われます。

覚如上人は、『改邪鈔』の中で、声明は「結縁けちえん分」であると書いておられます。「結縁」とは、仏道に縁を結ぶこと。調べを整えて仏さまのお徳をほめたたえるとき、それは新たな仏縁を結ぶご縁にもなるのですね。

^{*1} 文字の配列や音数に一定の規律のある詩



『改譜 正信偈和讚』より

お勤め

心に響く音色・歌声

古今東西を問わず、音楽は人の心に直接響き入ります。音色や歌声は、目に見えず、手につかめませんが、絶大な力を持っています。

たとえばグリム童話には、動物や子供たちが笛の音色に魅了されて、思うままに操られてしまう「ハーメルンの笛吹き男」という話がありますね。また、孤立した状態を表す「四面楚歌しめんそか」とは、敵に囲まれた兵士たちが、四方から聞こえる故郷の歌声を聞いて戦意を失ったという、歌の力を背景にした中国の故事だそうです。私たちも、懐かしの歌謡曲などを聞くと、自然と口ずさみ、胸が躍ることがあるでしょう。

声明も、私の心深くおどに宿り、光ひかりを与える

力があるのです。美しい^{せんりつ}旋律のお勤めに耳を傾けると、心が洗われ、お浄土の清らかな世界に包まれます。一同で声高らかにお勤めをすると、生き抜く力が^{みなぎ}漲ります。声明には、阿弥陀さまのお心を、私に響かせるはたらきがあるのです。

喜びを声高らかに

浄土真宗では、「正信偈」を朝夕お勤めする習わしがあります。偈とは、インドの言葉で、^{きんたん}讃嘆の「うた」という意味があります。^{わさん}和讃は七五調のうたですから、親鸞聖人がお念仏の教えを喜ばれた讃歌といえます。何百年もの間、人々に親しまれた「正信偈」と和讃をお勤めすると、そこに込められた感動が、私たちの心に共鳴してきます。お勤めするまま、親鸞聖人の「^{なま}生の声」といいたきたいものです。

お勤めは、阿弥陀さまのはたらきをダイレクトに伝える声なのです。正しい旋律を練習していただくのが一番ですが、たとえたとどしくとも、しっかり声に出してお勤めするところに、親鸞聖人と同じ喜びが^{あふ}溢れてくることでしょう。



お勤めの様子（親鸞聖人 750 回大遠忌法要より）

連絡先

©監修 本願寺仏教音楽・儀礼研究所

シリーズ大遠忌IV

声

明